

大衆性と投票判断基準の関連性に関する研究

—「おもしろい」候補者かどうか投票判断を支配したという一事実—

中尾 聡史 (京都大学 大学院工学研究科, nakao@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp)

宮川 愛由 (京都大学 大学院工学研究科, miyakawa@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp)

沼尻 了俊 (京都大学 大学院工学研究科, numajiri@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp)

藤井 聡 (京都大学 大学院工学研究科, fujii@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp)

A study on criteria of judgment for voting in election by the mass man

Satoshi Nakao (Graduate School of Engineering, Kyoto University)

Ayu miyakawa (Graduate School of Engineering, Kyoto University)

Ryoshun Nimajiri (Graduate School of Engineering, Kyoto University)

Satoshi Fujii (Graduate School of Engineering, Kyoto University)

要約

スペインの哲学者オルテガは、「自分に対してなんらの特別な要求を持たない」者のことを「大衆」と呼び、近代社会においてその出現が顕著となり様々な社会的弊害をもたらしていることを批判的に論じている。実際、我が国においても世論の空気に流されやすい「大衆」による人気政治が問題となっていることが指摘されている。そこで、本研究では、国民の直接的な政治関与の手段である投票行動に焦点をあて、オルテガの論ずる大衆性と投票判断基準の関連性を調査分析した。その結果、自己閉塞性の高い個人は選挙そのものに無関心である一方、傲慢性の高い個人は、自分自身で物事を深く考えず、候補者の知名度や、周りの人の意見、メディアでの評価といった周辺情報を重視し、とりわけ、候補者の「おもしろさ」という、いわゆる真面目とは言い難い基準をより大きく重視する傾向が示唆された。

キーワード

大衆の反逆, 大衆性, 傲慢性, 自己閉塞性, 投票判断基準

1. はじめに

議会制民主主義を基調とする我が国では、選挙によって選出された政治家が、議会に集まり社会の諸問題について議論を交わすことで政策が決定される。そのため、議会を構成する政治家各々が、自由な議論を行い総合的な政治判断を下すことのできる能力を十分に有していなければ、議会制統治は有効に機能しえない。そこで、重要となるのが、代表者を選出する有権者による投票行動である。なぜなら、政治家としての資質を備えた者が選出されるかどうかは、有権者の投票判断に委ねられるからである。つまり、より善き社会に向けて議会制民主主義が適切に機能するためには、正しい政治判断を下せる政治家を識別する能力を、国民が保持していることが重要な前提条件となる。

ところが、現代日本政治を振り返ると、2003年の衆議院議員選挙以降、具体的な個別政策や達成目標等を予め宣言した「マニフェスト」が選挙の争点となりつつあり、議会での議論が軽視される社会的風潮にあることが考えられる。マニフェスト選挙では、実施する政策の具体的内容が既に設定されているため、政治家による議会における是々非々の議論が軽視され、国民の意見が直接的に政治決定に反映される危険性が懸念されるのである。実

際、2005年の衆議院議員選挙や2011年の大阪府知事・大阪市長同日選挙において、「郵政民営化」「大阪都構想」といった具体的政策を選挙の争点に絞り、その是非を有権者に問うことで勝利を収めた小泉純一郎氏や橋下徹氏は、非常に高い支持率を獲得している (c.f. 森田, 2012; 瀬良, 2009; 吉田, 2011)。

さて、こうした現代日本社会における特徴的な政治現象を解釈する上で、理論的支柱として位置づけられる主要な論の一つとして、スペインの哲学者オルテガによる大衆社会論が挙げられる。オルテガは、その代表的著書「大衆の反逆」(1930)において、「自分自身に特殊な価値を認めようとはせず、自分は“すべての人”と同じであると感じ、そのことに苦痛を覚えるどころか、他の人々と同一であると感じることに喜びを見出しているすべての人 (Ortega, 1930 神吉訳, 1995, p.17)」のことを「大衆」とよび、20世紀初頭のヨーロッパ社会における、平等主義と技術主義に牽引された近代化によって「大衆」の出現が顕著となり社会的弊害をもたらしていることを批判的に論じている (なお、以下では神吉訳の「大衆の反逆」(1995)から引用するが、その際、該当箇所の見数のみ記載することとする)。

オルテガの大衆論の特徴は、「大衆」を数量的な概念ならびに政治的階級及び社会的階級として捉えるのではなく、精神の質である人間的階級、すなわち万人が備える心理的事実として捉えたところにある。オルテガは、「自分に対してなんらの特別な要求を持たない (p.18)」精

精神的に劣った者を「大衆」、その対極にある「自らに多くを求め、進んで困難と義務を負わんとする (p.17)」精神的に優れた資質を持つ者を「選ばれた少数者」や「貴族」と呼び、人間社会をこの2種類の精神的統一体として捉えたのである。そして、当時のヨーロッパにおいて上述のような心理的傾向を備えた「大衆」が「選ばれた少数者」に変わって「完全な社会的権力の座に登ったという事実 (p.11)」に対して警鐘を鳴らしたのである。その事実の一つとして「大衆の政治権力化 (p.20)」が挙げられており、「大衆」と政治との関係性を以下のように揶揄している。

「当時の大衆⁽¹⁾は、公の問題に関しては、政治家という少数者の方が、そのありとあらゆる欠点や欠陥にもかかわらず、結局は自分たちよりもいくらかはよく知っていると考えていたのである。ところが今日では、大衆は、彼らが喫茶店での話題からえた結論を実社会に強制し、それに法の力を与える権利を持っていると信じているのである。わたしは、多数者が今日ほど直接的に支配権をふるうにいたった時代は、歴史上にかつてなかったのではないかと思う。(p.21)」

かつては公共問題などに関する政治的判断は、その遂行に特殊な能力が要求されるために少数者によって遂行されていた。しかし、「大衆」は「おのれが凡俗であることを知りながら、凡俗であることの権利を敢然と主張し、いたるところでそれを貫徹しようとする (p.21)」ために、政治という特殊な才能が必要とされる分野においても、こうした「大衆」が優位を占めるようになったのである。さらに、オルテガは、こうした大衆社会では、少数者、反対者への寛容さが失われ、「自由主義的デモクラシー」(すなわち、リベラル・デモクラシー)が否定されることを指摘している。オルテガの言う「自由主義的デモクラシー」とは、人々が、それぞれ自由主義と法規範を遵守するという制約の下で、為政者に政治的決定を委ねるような政治形態のことであり、少数者への配慮を備えたものである。しかし、「大衆」によって「自由主義的デモクラシー」は否定され、「ほとんどすべての国において、同質の大衆が社会的権力の上ののしかかり、反対派をことごとく圧迫し、抹殺している (p.108)」と、オルテガは分析したのである。

こうしたオルテガの大衆社会論は20世紀初頭のヨーロッパ社会を対象としたものであるが、この「大衆」とは近代化によってもたらされたものであり、また万人が備える心理的事実である以上、近代化が達成された現代の我が国においてもオルテガの指摘した「大衆」なる心理特性を備えた人々が存在し得る可能性があり、さらに前述したような社会的風潮があるのであれば、それはオルテガの論ずるところの「大衆の政治権力化 (p.20)」の徴候である可能性が考えられる。現代日本における大衆化現象に対する問題意識から、先行研究では、大衆の心理的構造を読み解く指標として、オルテガの「大衆の反逆」に基づき、「大衆」が備える心理的特性、すなわち大衆性を規定する心理尺度が提案されている(羽鳥・小松・藤井, 2008a)。そこでは、大衆性が「傲慢性」と「自己閉

塞性」の二つの因子から構成されることが実証的に示されている。ここで、「傲慢性」とは「ものの道理や背後関係はさておき、とにかく自分自身には様々な能力が携わっており、自分の望み通りに物事が進むであろうと盲信する傾向」であり、一方、「自己閉塞性」とは「自分自身の外部環境からの閉塞性」を表している。

藤井・羽鳥(2014)は、この心理尺度を用いて、「人々の大衆化」が、現代社会の諸問題の根底に横たわっている可能性があることを実証的に明らかにしている。例えば、小松ら(2009)は、大衆性と景観問題に着目し、大衆性の高い個人は良質な風景を軽視し破壊する傾向にあることを示している。また、羽鳥ら(2008b)は、大衆性と政治権力に関わる問題の一つとして、公共事業をめぐる合意形成の問題に焦点を当て、現代社会において様々な形で見られる行政不信と公共事業を巡る合意形成問題の本質的な原因の一つが、大衆の心理にある可能性を実証的に明らかにしている。ただし、そこでは、大衆性と政府・行政に対する態度や行動の関係性についての検証は為されているものの、政治権力に対する最も直接的な関与であり、その振る舞いが社会に及ぼす影響はより深刻なものとなることが想定される投票行動との関係性は明らかにされていない。

冒頭で述べたように、より善き社会の実現に向けて議会制統治が適切に機能するためには、正しい政治判断を下せる政治家を識別する能力を、国民が保持していることが重要な前提条件となる。それ故、国民が果たして、その前提条件を具備しているのか、という根源的な問題に立ち返り、政治に関与する手段としてより影響力の強い投票行動の側面から、国民の大衆性と政治に対する態度との関連についての知見を蓄積することは、現代日本におけるあらゆる公的実践を考える上で、極めて重要な意味をもつものと考えられる。そこで、本研究では、上記の問題を、現代政治の場で検証すべく、自治体の有権者を対象とした調査及び分析を行い、オルテガの論ずる大衆性と投票判断基準の関連性を探索的に把握することを試みる。こうして得られた知見は、現代社会のあらゆる公的実践の根幹に位置する民主政体下での政治活動の方針を決定づける「選挙」が一体何によって左右されるのかを示唆するものとなろう。それ故、投票判断に関する論理実証的知見は、あらゆる公的実践の改善を企画した諸活動を展開する上で、重大な意味を持ち得ると期待される。

2. 方法

調査は大手インターネット調査会社に登録されているリサーチモニターのうち大阪府堺市の住民を対象に2013年6月下旬に抽出しインターネットを利用して実施し、500名から回答を得た。なお、調査の実施にあたっては、年代(20代、30代、40代、50代、60歳以上)・性別は均等となるようサンプリングを行った。当該地域では、2013年9月に、市長選挙が行なわれる予定であったことから、本調査は、当該選挙の有権者を対象として実施した。

本調査では、先行研究(羽鳥ほか, 2008a)に基づき、以下の2.1に示す個人の大衆性を測定するための質問項目を設定するとともに、2.2に示す投票判断に関する質問項目を設けた。なお、本調査では、2.1、2.2以外にも、情報源として接触するメディアやテレビ番組の視聴頻度などを尋ねているが、誌面の都合上、それらの質問項目は割愛する。

2.1 大衆性

個人の大衆性を測るための質問項目として、先行研究で提案された大衆性尺度を用いて表1に示すような2因子(傲慢性、自己閉塞性)計19項目の質問を設定し、各項目について、7.「とてもそう思う」～1.「全くそう思わない」の7件法で回答を要請した。傲慢性は、自分自身や社会等の種々の対象に対する自らの制御能力に関する過大な評価に関わる質問項目から構成される。一方、自己閉塞性は、外部世界に対する関心および外部世界との紐帯やその中での責務に関わる質問項目から構成される。そして、「傲慢性」尺度については対応する12項目の加算平均から、「自己閉塞性」尺度については対応する7項目のそれぞれを反転した上で求められる加算平均から、

表1: 大衆性尺度の質問項目

質問項目
「傲慢性」尺度 ($\alpha = .838$)
自分を拘束するのは自分だけだと思う
自分の意見が誤っている事などない、と思う
私は、どんな時でも勝ち続けるのではないかと、何となく思う
自分個人の「好み」が社会に反映されるべきだと思う
どんなときも自分を信じて、他人の言葉などに耳を貸すべきではない、と思う
「ものの道理」には、あまり興味がない
物事の背景にあることには、あまり興味がない
日本が将来なくなる可能性は、皆無ではないと思う*
世の中の問題は、技術ですべて解決できると思う
人は人、自分は自分、だと思ふ
自分のことを、自分以外のものに委ねることは一切許されないことだと思う
道徳や倫理などというものから自由に生きていたいと思う
「自己閉塞性」尺度 ($\alpha = .821$)
伝統的な事柄に対して敬意・配慮をもっている*
日々の日常生活は感謝すべき対象で満たされている*
世の中は驚きに満ちていると感じる*
我々には、伝統を受け継ぎ、改良を加え、伝承していく義務があると思う*
自分自身への要求が多い方だ*
もしも奉仕すべき対象がなくなれば、生きている意味がなくなるのではないかとと思う*
自分は進んで義務や困難を負う方だ*

注: α /クロンバックの信頼性係数、*は逆転項目。

それぞれの尺度を構成した。なお、各尺度の信頼性分析の結果、 α 係数は「傲慢性」については.838、「自己閉塞性」については.821となり、一定程度の信頼性が認められた。

2.2 投票判断基準

投票判断の基準を測定するため、「いろいろな選挙(国政、府知事選、市長選など)で誰に投票するかという判断には、以下のそれぞれはどれくらい関係していますか」という質問を設定し、以下の2.2.1～2.2.4に示す項目に対して、7.「とても関係している」～1.「全く関係していない」の7件法で回答を要請した。

2.2.1 「知名度」「周りの人の意見」「メディア」

オルテガによれば、「大衆」とは「一つの意見をしっかりと造り上げる努力をせずに、この問題に関する意見をもつ権利を有していると信じ込む(p.96)」者のことであり、また、「自分自身に特殊な価値を認めようとはせず、自分は“すべての人”と同じであると感じ、そのことに苦痛を覚えるどころか、他の人々と同一であると感じることに喜びを見出しているすべての人(p.17)」のことである。つまり、「大衆」には、自分自身で物事を考え判断することを避け、周りの人の意見に同調するという性質があると解釈できる。そこで、投票判断の基準として「候補者の「知名度」はどうか?」「自分の周りの人」の意見はどうか?」「候補者に対する新聞、テレビなどのマスメディアの「評価」はどうか?」の3項目を設けた。

2.2.2 「古い政治からの脱却」「改革」

「大衆」は「自分が過去のどの生よりもいっそう生であると感ずるあまり、過去に対するいっさいの敬意と配慮を失ってしまった(p.47)」のであり、当時のヨーロッパ文明が「過去のいかなるものにも、規範や模範たりうる可能性を認めない時代(p.48)」へと陥落しつつあるとオルテガは洞察している。したがって、「大衆」の性質に、政治や政策に対しても過去の忘恩や過去を捨て去り、新しさを求める改革志向が内在していると考えられる。そこで、投票判断の基準として「「古い政治から脱却できる」かどうか?」「「改革」できるかどうか?」の2項目を設けた。

2.2.3 「おもしろさ」

「大衆」は「国家という組織が不安定なものであるということに気づかないし、自己のうちに責任を感じるということがほとんどない(p.143)」者のことである。オルテガはこうした「大衆」の心理状態を「甘やかされた子供」「慢心しきったお坊ちゃん」「良家の御曹司」のものと同様であると批判している。

「不まじめと「冗談」、これが大衆人の生の主調音なのである。彼らが何かをやる場合は、「良家の御曹司」がいたずらをするのと同じように、自分の行為は取り消すことができないのだという真剣さに欠けている(p.147)」

こうした「不まじめと「冗談」を表す投票判断基準と

して、「おもしろい」候補者かどうか?」という項目を設けた⁽²⁾。

2.2.4 「所属政党」「政策」「人柄」

これらの他にも、投票判断基準として、「候補者の「所属政党」はどこか?」「候補者の「政策」がどのようなものか?」「候補者の「人柄」はどうか?」の3項目を設けた。

3. 結果

以上に述べた大衆性を構成する2尺度と投票判断の基準に関する質問項目間の相関分析を行った。その結果を表2に示す。

まず、自己閉塞性尺度に着目すると、全ての質問項目において0.1%水準で統計的に有意に負の相関が示された。この結果は、自己閉塞性の高い個人は、選挙時の投票判断において前述の基準の全てが無関係であると認識する傾向、すなわちこれらの基準を軽視する傾向があることを示唆している。なお、その中でも相関係数の絶対値が最も大きい値を示した項目が「候補者の「人柄」はどうか?」であったことから、とりわけ候補者の人柄を軽視する傾向にあることを示唆しているものと考えられる。

次に、傲慢性尺度に着目すると、「候補者の「知名度」はどうか?」「自分の周りの人」の意見はどうか?」「おもしろい」候補者かどうか?」の3項目において0.1%水準で統計的に有意に正の相関、「候補者に対する新聞、テレビなどのマスメディアの「評価」はどうか?」において1%水準で統計的に有意に正の相関、「候補者の「所属政党」はどこか?」において5%水準で統計的に有意に負の相関が確認された。これらの結果は、傲慢性の高い個人は、投票判断の基準として、所属政党を軽視する傾向にある一方で、候補者の知名度や、周りの人の意見、メディアでの評価、候補者の面白さを重視する傾向があることを示唆している。また、その中でも相関係数の絶対値が最も高い値を示した項目が「おもしろい候補者かどうか?」であった。

4. 考察

本研究では、オルテガの論ずる「大衆の政治権力化(p.20)」が、現代の我が国においても進行しつつあるのではないかという問題意識のもと、大衆性と投票判断基準の関連性を探索的に把握することを目的として調査分析を行った。その結果、自己閉塞性の高い個人は、本研究で設定した全ての投票判断基準を軽視しており、とりわけ候補者の人格をより大きく軽視する傾向が示唆された一方で、傲慢性の高い個人は、候補者の知名度や、周りの人の意見、メディアでの評価、候補者の面白さといった周辺情報で投票先を決定し、とりわけ、候補者の「おもしろさ」という、いわゆる「真面目」とは表現し難い基準をより大きく重視する傾向が示唆された。

ここで、本研究の分析結果をオルテガの大衆社会論を踏まえつつ解釈を行うと、自己閉塞性とは「自分自身の外部環境からの閉塞性」を表した尺度であることから、自己閉塞性の高い個人は外部への配慮を欠いており、さらに投票判断の前提となる各種の要因について配慮する傾向そのものが低く、とりわけ候補者の人格を軽視するという側面が見られたことから、自己閉塞性の高い人物は、選挙そのものにも無関心である傾向があるものと解釈できよう。

一方、傲慢性とは、とりたてて根拠が無いにも関わらず、とにかく自分自身には様々な能力が携わっていると過信し、自分の望み通りに物事が進むであろうと楽観している程度を意味するものである。それ故、本研究の分析結果から、傲慢性の高い人物は自分自身で物事を深く考えず、候補者の知名度や周りの人の意見、メディアでの評価といった、表面的な情報を判断基準に投票先を決定しているものと解釈できよう。さらに彼らは、公益・国益の毀損リスクにも配慮する適正な態度とは言いがたい「おもしろい」という基準でもって投票を行っても、さして大きな問題は起こらないだろうと、傲慢にも自分の好み通りに政治が進むであろうと楽観している、という可能性が考えられる。

また、「自己閉塞性」と最も強い負の相関を持ったの

表2：大衆性と投票判断基準の相関分析結果

	平均	標準偏差	傲慢性		自己閉塞性	
			r	p	r	p
候補者の「知名度」はどうか?	3.476	1.600	.247 ***	<.001	-.286 ***	<.001
「自分の周りの人」の意見はどうか?	3.426	1.611	.179 ***	<.001	-.259 ***	<.001
候補者に対する新聞、テレビ等のマスメディアの						
「評価」はどうか?	3.796	1.623	.145 **	.001	-.296 ***	<.001
「改革」できるかどうか?	4.764	1.622	-.046	.302	-.361 ***	<.001
「古い政治から脱却できる」かどうか?	4.788	1.731	-.072	.108	-.324 ***	<.001
「おもしろい」候補者かどうか?	2.850	1.532	.305 ***	<.001	-.276 ***	<.001
候補者の「所属政党」はどこか?	4.966	1.775	-.090 *	.045	-.302 ***	<.001
候補者の「政策」がどのようなものか?	4.948	1.732	-.074	.100	-.356 ***	<.001
候補者の「人柄」はどうか?	4.628	1.673	.029	.511	-.426 ***	<.001

注：r 相関係数、p 有意確率、* 5% 有意、** 1% 有意、*** 0.1% 有意（両側）

が「候補者の人格」であったという点、ならびに、「傲慢性」と最も強い正の相関を持ったのが候補者の「おもしろさ」であったという点は、大衆性の高い人々の投票行動の特徴を指し示す結果であると解釈できる。そもそも、代議制統治制度における代議士は「適正な議論を行う能力をもっている」という点が何よりも重要な資質であると考えられる (c.f. J. S. Mill, 1861)。それにも関わらず、傲慢で自己閉塞的な大衆性の高い人々は、適正な議論を行う能力と関連するとは言い難い「おもしろさ」を重視し、適正な議論を行う能力と強く関連すると考えられる「人格」を軽視する傾向があることが示された。この結果は、議会制民主主義において求められる国民の「選挙民としての資質」を判断する上で、大衆性の高低が極めて重要な心的特性である可能性を示唆するものと言えよう。

なお、以上の結果について改めて留意すべき点は、本研究で対象とした「大衆」とは、特定の間人や集団のことではなく、万人が多かれ少なかれ持ち得る心理的側面であるという点である。すなわち、国民各々が、程度の差こそあれ、大衆性という心的傾向を少なからず有している可能性があるということである。選挙では年齢制約を満たすことで、ほぼ全ての国民に投票資格が与えられていること、また、選挙は国民が政治に関与する手段としてより影響力の強いものであることを考慮すると、人々の大衆化が、我が国の政治に重大な影響を与えている、もしくは与える可能性があることを本研究の結果は示唆しているものと考えられる。

ただし、こうした解釈の妥当性を確認するためには、さらなる実証的検討が必要であることは言うまでもない。また、本研究で用いているデータは大阪府堺市の住民のみを対象として得られたものであることから、今後はより広範なデータを収集した上で、より包括的な分析を行っていくこともまた必要であると考えられる。

注

(1) ここでオルテガが用いている「当時の大衆」という表現は、オルテガの指摘する近代化によって出現した特定の心理的傾向を持った「大衆」ではなく、それ以前に存在していた社会的階級としての大衆と考えられる。例えば、「以前ならばわれわれが「大衆」と呼んでいるものの典型的な例たりえた労働者の間に、今日では、練成された高貴な精神の持ち主を見出すことも稀ではないのである。(p.19)」と述べているように、「以前の大衆」が「貴族」なる精神を持ちえ、オルテガの論ずる「大衆」とは異なることが言い表されている。

(2) 「おもしろい」という言葉は、『日本俗語大辞典』において、「おもしろい。もとは関西の言葉。」と記されているように(米川, 2003)、「おもしろい」と同様の意味を持つ関西の言葉として認識されている。一方、吉岡(2006)は、「「おもしろい」はたしかに笑いに結びついているが、その笑いはどこかに諦観を含んだ笑いである。それは素朴な願望や計画といったものが、節度を越えた現実の過酷さによってことごとく裏切られた末、そ

れでもなお生き続けている、といった事態に向けられる笑いである。(p.114)」と述べている。また、吉岡は、「おもしろい」は「笑いという身体的反応とより強く結びついている (p.114)」と述べ、「おもしろい」という言葉が標準語における「おもしろい」という言葉とは異なる意味を持ち得る可能性を指摘している。

「おもしろい」という言葉は前述のように、関西の言葉であるが、とりわけ大阪においては、漫才や落語、喜劇といった「笑いの文化」が盛んであるばかりでなく、生活態度や価値観、ものの考え方の中にも「笑いの文化」が含まれており、大阪人の生活・暮らしにおいて「笑い」が重要な位置を占めている(井上, 2006)。

それゆえに、この笑いという身体的反応とより強く結びついている、関西特有の「おもしろい」という言葉は、「笑い」が重視される大阪において、形容する対象に対して何らかのポジティブな評価を与える言葉であると考えられよう。例えば、「おもしろいやつ」のように人物に対して用いられた場合には、人物評価としてポジティブな意味を持ちうるものであるとも考えられる。

しかし、吉岡はまた、学校の授業や、役所や会社での会議などの、公的な言説の場、つまり、何かについて「発言」したり「問題提起」したり「議論」したりするという手続きが規範化されているような空間において、「おもしろい」という言葉が発話されると、「ふざけているかのように聞こえる」と述べている。

つまり、「おもしろい」という言葉は、日常の生活における人物評価においてはポジティブな意味を持ちうるものの、公的な言説の場においては、「ふざけている」という意味が付与されるのであり、ましてや極めて公的な場である政治において、また、政治に大きく影響を与え得る投票行動を行うにあたって、「おもしろい」かどうかといった基準でもって判断することは、「ふざけた」ものであることが考えられるのである。

以上の理由から、大阪府堺市の住民を対象とした本研究において、オルテガの指摘した「まじめ」と「冗談」を表す尺度として『「おもしろい」候補者かどうか?』という項目を設定することとした。

なお、実際に、このような「おもしろい」という基準が投票判断において望ましいものでないという傾向が存在する可能性は、本文において後述する表2の投票判断基準の各項目の中で、『「おもしろい」候補者かどうか?』という基準の平均得点が他の基準に比べ小さな値を取っていることから推察できよう。

引用文献

- Gasset, O. Y. (1995). 大衆の反逆 (1930 年刊). 神吉敬三訳, ちくま学芸文庫.
- 羽鳥剛史・小松佳弘・藤井聡 (2008a). 大衆性尺度の構成—“大衆の反逆”に基づく大衆の心的構造分析—. 心理学研究, Vol. 79, No. 5, 423-431.
- 羽鳥剛史・小松佳弘・藤井聡 (2008b). 政府に対する大衆の反逆—公共事業合意形成に及ぼす大衆性の否定的

- 影響についての実証的研究一. 土木計画学研究, Vol. 25, No. 1, 37-48.
- 井上宏 (2006). 大坂の「笑いの文化」について—大阪人の生活文化と笑い—. フォーラム現代社会学, Vol. 5, 57-68.
- 小松佳弘・羽鳥剛史・藤井聡 (2009). 大衆による風景破壊: オルテガ「大衆の反逆」の景観問題への示唆. 景観・デザイン研究論文集, No. 6, 23-30.
- 藤井聡・羽鳥剛史 (2014). 実学としての社会哲学 大衆社会の処方箋. 北樹出版.
- 森田実 (2012). 「橋下徹」ニヒリズムの研究. 東洋経済新報社.
- ミル, J. S. (1997). 代議制統治論 (1861年刊). 水田洋訳, 岩波文庫.
- 瀬良良子 (2009). 小泉元首相の言葉—ワンフレーズ・ポリティクスと演説—. 人文論集, Vol. 44, No. 1/2, 99-112.
- 米川明彦 (2003). 日本俗語大辞典. 東京堂出版.
- 吉田徹 (2011). ポピュリズムを考える—民主主義への再入門—. NHK ブックス.
- 吉岡洋 (2006). 「おもろい」—興趣の大坂的な表現をめぐって (特集「大坂画壇」は蘇るか?—「綺麗なもん」から「面ろいもん」まで). 美術フォーラム 21, Vol. 17, 113-116.

Abstract

Spanish philosopher, Ortega, defined the mass men as people without any particular desire to themselves, and criticized their remarkable appearance in modern society caused various social problems. In practice, it is often said in Japan that the mass men, who are easily influenced by the public opinion, causes the populism in politics. In this research, we focus on the vote, which is the direct method for citizens to relate the politics, and survey the relevance of the vulgarity of the mass men and voting behavior with a Web questionnaire. As results, it is suggested that self-closed people tends to be indifferent to election itself, and arrogant people tends not to think over, and to put much emphasis on the peripheral information such as popularity of candidates, the evaluation in mass media and, especially, the flippant criteria of the degree how the candidates are amusing for them.

(受稿：2016年4月7日 受理：2016年5月17日)